

	<p>エッセイ</p> <p>地域のミニコミ誌編集長奮戦記</p> <p>SCE・Net 山崎 徹</p>	<p>E-41</p> <p>発行日 2012/8/30</p>
---	--	--------------------------------------

私が住んでいる渋谷区初台の町会では、機関紙を年4回発行して既に満10年を越えて継続している。誌名を『さわやか初台』という。2008年の秋、その『さわやか初台』の編集長に町会長が突然私を指名した。会長の眼には当時の編集委員会は独走し、町会長が意図した方向と違ってきたと映ったらしい。そこで私を編集長にし、編集委員も全取替えるという荒療治に出た。お蔭で怒った前任者たちからは言われのない誹謗中傷を受け、満足な引き継ぎもないうちに2009年1月号の発行に取り掛からなければならなかった。

そこで考えた。『さわやか初台』という誌名は引き継ぐが、体裁も内容もボリュームも一新してやろうと。従来はA3用紙裏表にテーマごとの記事を囲みに入れてべたべた貼りつける、いわば壁新聞スタイルであったものを、縦書きが原則の完全な新聞スタイルとし、A2用紙二つ折りの4頁とした。ただし紙は上質紙を使い、オールカラーゆえ、新聞よりきれいで高級感がある。

トップページは地域の課題や話題を特集記事として取り上げ、2～3頁目は町会や地域の行事を写真入りでニュースふうに掲載、最後の頁は地域の昔話などの読み物を連載で載せ、また町会員が書いたエッセーや短歌、俳句など投稿で埋めることとした。掲載する写真は町会員の顔が分かるものを敢えて掲載し、読者に知っている人が載っていると興味を持ってもらえるようにした。肖像権などのクレームがつくことを気にしたが、狭い地域でしか通用しない新聞ということもあり、今のところ問題は生じていない。新聞の死亡公告を真似て、町会員およびその家族が亡くなった時は、その時期と氏名、年齢などをお悔やみの言葉とともに掲載することにした。このことを町会の役員会で説明したところ、一部の役員から驚きの声と共にそんな縁起でもないものは載せる必要ないという声が上がったが強行した。今では当たり前になったが、最近家族が亡くなったことを公表したくないと掲載を断ってくることもあり、そのような場合は止むを得ず従っている。

以来、今日まで年4回の発行を死守して15号を発行してきた。つまり3.75年間、編集長を続けて来たことになる。発行部数は2100部。町会員の世帯に配るほか、渋谷区長を始めとして区役所の各部署や警察、消防署や地域の諸団体にも配っている。渋谷区立の図書館にも寄贈し資料として保管してもらおうと共に、閲覧にも供している。新しい機関紙は読み度があり、地域に関する話題が多いので、評価が高まってきたのを実感している。出来上がった新聞の束を抱えて町内を歩いていると、『さわやか初台』が出来上がったのですか？楽しみにしているのだから今だけでもいいですか？と声をかけられることがある。隣家の住民が初台から転居したものの、その御主人が初台を懐かしがっていると聞き、『さわやか初台』を定期的に送ってあげている人がいる。御主人は喜んで丁寧にファイルして

繰り返し見てくれているという。役員を介して、「この記事が良かった、ここは良くなかった」という声も聞こえてくる。反応があるのは励みになる。前任の編集者たちからは一言の発言もなくなった。都会の住宅地ということもあり、町会の組織率も高くない。これからは『さわやか初台』を読みたいから町会に入ろう」と言わせたいと意欲をわかせている。

特集記事としてどのような内容のものを取り上げたか紹介しよう。一つは行政が地域に周知徹底したいと思っていることの片棒を担ぐような記事、堅苦しくなりがちだが、町会機関紙として取り組む必要があると思っている。もう一つは地域に関わる昔話や地域に住む有名人訪問記など、こちらは読者に喜ばれる。1月号は渋谷区長や地域団体の長の挨拶や町会役員の顔触れの紹介や抱負など、決まり切った内容が並ぶが、毎年同じにならないように少しずつパターンを変えている。

行政が望むであろうテーマの事例として、二つを紹介する。

一つは地震対策。渋谷区は発災後の町民の行動として、先ず近所の被害が出た家屋の助け合いや初期消火に努め、周囲に危険が迫ったら誘いあって区と町会が決めた一時集合場所（町内にある小学校）へ集まる。さらに危険が迫ると判断した時は町会役員の誘導で避難場所と指定されている代々木公園までまとまって避難する。自宅が倒壊しあるいは焼失して生活の場を失った人は町内の小学校や近隣の中学校やスポーツセンターが避難所となり、そこで町会役員をリーダーとする運営の下、避難生活を始めることになる。区の決めたこのような防災計画を調べて、分かりやすい言葉で解説した。東日本大震災が起こる前の2009年7月号のことである。この時は頑張った割には反響が乏しかったが、東日本大震災が起こった1年後の2012年4月号に再度「東日本大震災から1年、日頃から地震への備えを」という見出しで地震対策を取り上げた。今回は渋谷区防災課の若手の役人に行動指針を書いてもらい、それに編集部が補足し、解説するという形を取った。東京でも直下型の地震が起こる確率が高いという情報が知れ渡ったせいか、紙面で述べたことを参考に自らの地震対策を考えようという人も出て来たようだ。

もう一つは家庭ごみの3Rの勧め。3Rとは何かをサーマルリサイクルも含めて解説し、家庭ではどのような3Rができるかを訴えた(2010年4月号)。この記事を肉付けるため、町会で渋谷区の清掃工場の見学会を開催し、その見学記を掲載した。また渋谷区が町会役員を対象にして行ったリサイクル工場(エフピコ)の見学ツアーにたまたま参加したので、その見学記も載せた。私としては力の入った紙面だったが、いまいち反響がなかった。最近、渋谷区から区の清掃・リサイクル審議委員への就任要請が私に届いた。有識者を集めて清掃・リサイクルの問題について区長に提言する場であって、私には町民代表として加わってほしいという。町民代表は本来、希望者に小論文を書いて申請させ、その中から選考することになっているが、該当者がいなかったのかもしれない。区長あるいは区の幹部職員が『さわやか初台』の3Rの記事を覚えていて、あの執筆者にやらせろということになったようだ。どこかで見てくれる人がいると実感した。光栄なことと受けたものの、秋に開講するSCE・Netの社会人向け公開講座の環境科目の講義を改めて熱心に聴かなければ

ならない羽目に陥った。

地域に関わる昔話や話題を扱う特集記事は概ね好評だ。昨年（2011年）は地域の氏神である代々木八幡宮の創建から800年を迎える記念の年であり、また町内にある幡代小学校の創立130周年を記念する年であった。そこで代々木八幡宮の創建から現在に至る道のりの執筆を禰宜さん（作家の平岩弓枝さんの娘さん）に、幡代小学校の歴史の執筆を校長先生にお願いした。お二人とも快諾し、それぞれ2011年の7月号、10月号のトップページを飾った。幡代小学校の場合は戦中と戦後の卒業生で初台在住者に当時の思い出を書いてもらい、花を添えた。

初台には芸能人や野球人も住んでいるようだが、西鉄ライオンズの選手だった中西太さんが特に有名だ。その中西太さんを訪ねて、インタビューを行ったのが思い出深い（2010年10月号）。私自身も高校生のころからファンであった中西さんを訪問するのは緊張したが、三原監督との出会いやプロ入りするいきさつ、西鉄時代の華やかな活躍、選手や監督、コーチを経験して得られた人生訓や結婚のいきさつ（中西夫人は三原監督の娘さん）までインタビューし、フランクに答えていただいた。それを基に記事を起こしたのは大変だったが、いま読み返しても良い記事になったと自負している。

昨年の福島第一原発の事故で東京の夏場の電力供給がタイトになると見込まれ、化学工学会のエネルギー部会の先生方が電力不足対策について緊急提言を行われた。昨年4月に行われたシンポジウムで先生方が節電対策についてはどんなところにも出向いて理解を求めたいとお話しされていた。初台町会では6月初めに総会を開催するが、その客寄せの意味も込めて講演会を開き、その後に総会を開催するのが常であった。今年の講演会は節電対策の話にしようと思い立ち、学会を通して講演をお願いしたところ、早稲田大学の松方正彦先生が快く受けて下さることになった。町会の役員には大学の偉い先生が見えるということで当惑する向きもあったが、私としては折角講演していただくのに聴講者が少なくでは申し訳ないと、ポスターを作り、さらに新聞に折り込みでチラシを入れて宅配し、宣伝にこれ努めた。結果は聴講者50名弱ということで例年と変わらず、会場一杯の80名くらいは集めたいという思惑は空振りに終わった。当日は地元の小学校の運動会が雨天順延で開催されるなど、不運が重なった。講演は夏場の電力供給見通しと私達が心掛ける節電対策について熱っぽく語っていただいた。楽しく生活しながら電気を使わないライフスタイルを作り上げようと訴えられたのが印象的であった。折角の話を50名弱の人の間に留めておくのは勿体ないと、講演要旨を『さわやか初台』に掲載した（2011年7月号）。講演を文章化するに当たっては、あれも切れない、これも切れないということで出来上がりA3用紙2頁にまたがる大作となってしまった。この号は結局、通常4ページのところ、6ページ編成として対応した。いろいろ思いを込めた講演会とその記録であったが、あまり反響が返って来なかったのは寂しかった。ちなみに今年の6月の総会に伴う講演会は、近くで開業する整形外科医による「中高年のひざ痛、腰痛の治療と予防、自己管理」についての話であった。町会の会合に集まるのは概ね年配者ということもあり、こちらは好評

であったようだ。

町会機関紙『さわやか初台』の最新号（2012年7月号）の一部を以下に示した。今年の6月の総会で12年間、町会長を務めた88歳の先輩が辞意を表明した。これは町会のニュースであり、トップ記事で扱った。次の会長は何と私。町会の仕事に汗をかくのが年配者になるのは止むを得ないとして、もっと若い世代の人達にも関心を持ってもらいたいと願っている。そしてその触媒に『さわやか初台』がなってくれたらうれしい。現実には紙面に寄稿するのはほとんど年配者だ。現役のお父さん、お母さん世代の文章が載るように働きかけを強めたい。

初台町会機関紙 季刊

さわやか初台

2012年（平成24年）7月 第43号 無料配布

発行 初台町会
発行責任者 山崎 徹
編集責任者 同上
初台 2-10-2 EL/FAX:03-3370-5475
E-mail : yamazaki@dk.catv.ne.jp

平成24年度定時総会で

村田会長退任を表明

6月2日（土）午後2時から初台区民会館で開催された初台町会の総会で、平成23年度事業報告および決算、平成24年度事業計画および予算が承認された後、村田会長が退任を表明された。後任は山崎副会長を推薦、総会で承認された。

総会は第1部として辻整形外科院長の

掲載

辻先生の講演「要旨を3頁に掲載」を聴いた後、開会した。冒頭、来賓としてお招きした桑原渋谷区長、渋谷区議会議員から挨拶いただいた後、議長に村田会長を退任、議事に入った。出席者は60名。

平成23年度の事業報告が横地副会長から、決算報告が有浦会計担当から行われ、次いで番場および柴監査担当から監査の結果、決算に異りがないことが報告され承認された。また平成24年度事業計画案について横地副会長から、予算案について有浦会計担当から説明があり、承認された。【平成23年度決算と24年度予算を2頁に掲載】

（挨拶）

前初台町会長 村田英郎

平素何かとご高配を賜りまして厚く御礼申し上げます。私こと6月2日開催の初台町会平成24年度総会をもちまして初台町会会長職を辞することを承認いただきました。

戦前からの古い歴史を持つ初台町会の戦後第7代町会長として先代小林千代美さんから平成12年6月6日に御指



名を頂きましたが、先々代の斎藤さん時代から御一方には役員として心傷や御指導などを頂いたことを思い出しました。それからは12年間大過なくその任を済ますことが出来ました。町会員皆様のご理解とご協力の御陰と深く感謝いたします。紙上をお借りしてご報告と御礼を申し上げます。12年間の思い出を記事にして寄稿するようにお願いを頂きましたのでできたら「こんなことあんなこと」を思い出してお世話になりました皆様へ御恩返しを致します。日赤奉仕団や美化推進・戦没者慰霊祭などもう少しの間御一緒に仕事をさせて頂きたくしますのでその節はよろしくお引き直し頂きます様をお願いを申し上げますと共に御厚誼いただきました会員御一統様の御繁栄を祈念して御挨拶にかえさせて頂きます。

町会長就任の挨拶

初台町会長 山崎



去る6日の初台総会で承りいただきましたが、企

して過ごしてきた中で培ったものの発展に貢献できればとの思いでお引き受けすることを決心しました。初台町会は10数年にわたって村長長の指導の下で発展してまいりました。長年のご努力に感謝申し上げます。そして村田前会長が数いた引き継ぎ、幾許かのプラスアルファを加えて発展させていきたいと

特に、東日本大震災から後、災害の活動に地域の絆が大切であった。



私はこのミニコミ誌を作ることが好きなようだ。衆知を集めて企画し、集めた原稿が紙

面にレイアウトされて、命を吹き込まれたように生き生きとしてくるところが醍醐味だ。現役時代にこの手のことに関わったことは全くない。子どもの頃、妹や近所の小さい子を相手に絵本をシリーズで作って悦に入っていたことを思い出す。その頃の記憶が呼び覚まされたのかもしれない。PCの発達で人手を介さず思うように紙面のレイアウトができることも効いているのだろう。編集長は当分手放さないで自作自演を演じるつもりだ。来年いっぱい続けると、5年間20号を発行したことになる。この20号を縮刷版にして自費出版して読んでくれる皆様に配りたいなどと夢見ている。

(私が編集長として発行した『さわやか初台』はPDF版をCDに入れて御希望の方に差し上げることができます。興味があればご一報ください。)

以上